

「人」

経歴 **Takuhiro Nozaki**

平成26年 4月 総務省採用
同 自治行政局選挙部選挙課

平成26年 8月 現職

高知県総務部政策企画課 **野崎 拓洋**

経歴 **Rika Tsunoda**

平成26年 4月 総務省採用

現職

新しい時代を創る挑戦の毎日

情報通信国際戦略局国際経済課 **角田 梨翔**

昨夏からの地方赴任は、私にとって、人情の機微に対する感性を鍛錬するいわば道場となっています。人間の心という奥深い世界に対する飽くなき探求心が原動力となって、理想的な国のあり方について模索していくようになる感覚を、総務省で働くことの魅力のひとつとして微力ながらお伝えすることができれば幸いです。

赴任先で感じる

高知では酒の文化が根付いていることも幸いして、そこに暮らし生きる人々の「想い」に触れる機会が数多くあります。友人と一緒に遊び、世間話を花を咲かせて盃を交わすのは勿論のこと、高知の食を堪能する食事会へ定期的に参加したり、地元の方のお話を伺うために農家民宿に泊まったりしたこともあります。一方で、部局の垣根を越えてのオフサイトミーティングや、若手による勉強会も実践されています。「何のために働くのか」「何をするときが一番幸せか」直接言語化された答を得られることはさほど多くはないですが、枚挙に遑がない数々の対話によって、職員および県民の方々の多種多様な人生観や感性を垣間見ることが出来ます。そうした新鮮な外的刺激を毎日のように受けることができる、極めて恵まれた環境への最大限の感謝と敬意を忘れることなく、自身の原体験で凝り固まった価値観を徐々に再構築していけるよう、日々精進しているところです。

仕事をするうえで

「分権って何だと思う？」私が担当する業務に関連して、課長がこう問うたことがありました。地方分権については、平成5年の国会決議をエポックメイキングとして、爾来今日まで20年余りにわたり具体的な改革が既に実行されてきているところですが、新形式である「提案募集方式」が今年度より導入される等、まさに現在進行形で制度設計がなされているトピックといえます。他の制度改革同様に、分権においてもall-or-nothingではない議論が重要で、規制緩和や事務・権限の移譲を形式的に実施して満足することも、また、事務量の増加を理由に、無碍に移譲や緩和を拒むことも好ましくはないと思いますが、それでは何を軸に個々の事例について判断すればいいのか、となると容易ではなく、当時課長の問いかけが胸に応えたことを鮮明に記憶しています。最終的に標榜されるいわゆる「正論」の中に、実際に事務を扱うことになる個々の行政主体の実情や、サービスの変化を望むも望まないも入り混じる住民の声なき声をどれだけ斟酌して、一つの結論を得るこ

とができるのか、それはおそらく、霞ヶ関の机の上だけでは実現できないことであろうと思っています。

総務省職員として向き合う「人」

総務省は、地方行政・税制・財政という枠組みを通して、分野横断的に住民の暮らしを支える仕事を担っています。それゆえに、歴史的背景も含めた制度全般についての深い造詣に加えて、制度のもとで暮らすことになる人々に対して思いを馳せることのできる「想像力」が要求されるのだ、そのように入省前から再三耳にしたものでした。振り返れば、業務説明会で、赴任先の被災地で目の当たりにした光景と尽力を、当時学生だった私達に涙ながらに語っていた職員がいたことを思い出します。他方で、ある晩に市内の酒場で県勢を語り合う最中に、「なぜ国の役人が県庁にいるのか」と私に訊ねた同僚の真剣な眼差しを忘れることもありません。この国の人や企業、そしてそれらを支える各自治体のパワーを、合成の誤謬とならないように国全体としてのそれへと変換するためにはどうしたらいいのでしょうか。キャリアパスや形式的な役割に拘泥するのではなく、地方自治のレゾナントルを自問自答しながら、人々の「想い」を唯一無二の羅針盤に据えて国家の根幹の制度を作りあげるといふ使命感をもって働くことが、ここでは求められているように思います。

最後になりましたが、大変僥倖ながら、前途有望な皆様がそれぞれに最善の進路選択をされることを心より祈念いたします。



よさこい祭りにて

未来につながる仕事

私は、国際経済課で、欧米諸国との国際交渉、各国の政策動向の情報収集を担当しています。欧米先進国とは、国際秩序の維持、TPPなどの通商交渉妥結等に向けて、連携すべき政策課題が数多くあります。現在の部署での私の担当国は約40カ国あり、面積にすると地球の約半分に及びます。国際交渉を行うためには、日本の未来のあるべき姿を常に考えながら、国家間の合意に向けた議題設定や合意文書の作成等たくさん準備を進めていかなければなりません。相手国政府にはその分野に何年も携わっている方もおり、相応しい交渉相手となるには、一年目でも自発的に勉強し、その道のプロとなることが求められます。今は、空き時間を見つけて必死に勉強する日々ですが、良い意味でゴールがなく、知的好奇心が刺激され、毎日充実しています。情報通信分野は技術の進歩が早く、若手ならではの新しい意見が求められます。国際経済課での新しい取組として、欧米諸国に進出する日本企業のコンテンツビジネス等の展開支援戦略を考える際には、一年目の私が作った戦略案が、課としての戦略の素案となりました。ICT(情報通信技術)は、新しい時代の生活やビジネスに欠かせない必須のインフラであり、その政策に携わるといことは、すなわち、新しい時代を創造していくことです。今、私たちの行っている様々な国際交渉や政策が、未来の日本及び世界の人々の豊かな生活につながっていると思うと、非常にやりがいを感じます。

ワシントンD.C.への初出張

私は、配属後すぐに、日米間の会合に参加するため、ワシントンD.C.に出張する機会を得ました。右も左も分からない中、出張の準備を目まぐるしい速さでこなさなければならず、毎日が挑戦の連続でした。しかし、自分が米国の法案を調べて作った資料が、実際に交渉で用いられたことはとても嬉しく、部下に成長のチャンスを与えてくれる厳しくも温かい上司に恵まれていると改めて感じました。目の前の仕事に全力投球し、無事会合をやり遂げた経験は今の私の自信になっています。

総務省との運命的な出会い

そもそも私が総務省を志したきっかけは、現在所属している国際経済課でインターンをしたことでした。学生時代に情報通信分野に興味があったこともあり参加したのですが、配属先で、生き生きと働く先輩方に出会い、単純に「カッコいい！私もこうなりたい！」と思いました。特に、インターンで出会った課長補佐の先輩方からは仕事を通して人生を楽しんでいる様子が伝わってきました。様々な企業のインターンに参加しましたが、ここまで未来の理想の自分の姿を想像できたのは総務省だけでした。また、総務省の業務を知るうちに、ICTを通して幅広い政策課題に携われることを知り、好奇心旺盛で色々なことにチャレンジしたい自分にはぴったりの職場だと思いました。入省後に御世話になった先輩方もそれぞれ魅力的で尊敬できる方ばかりで、インターン時に描いた思いはさらに強くなっています。

夢を目標に変えて

総務省は、やる気さえあれば様々なことにチャレンジでき、留学や大使館勤務などのキャリアアップの機会も充実しています。また、総務省には家事や子育てをしながら第一線でバリバリ活躍している女性も多く、このようなロールモデルの存在は、私の夢であり目標となっています。入省して約一年で、私の世界は確実に広がりました。これからも総務省でやってみたい仕事はたくさんあり、留学、結婚、子育ても経験したい。いつか私も周囲の先輩方のように、日本の政策の舵取りができる総務官僚になりたい！そんなことを夢見つつ、日々頑張っています。政策立案という形で世の中に貢献しつつ、自分自身も成長させたい方、一緒に総務省で新しい時代を創る挑戦の毎日を送ってみませんか。



会合にて米国側議長のスピルズベリー副調整官と



米国國務省前にて